

各種梅毒血清反応検査法の比較検討

庄 司 キ ク *

I はじめに

最近、梅毒血清反応検査法として、従来のVDRL法及びワツセルマン法（緒方法）に加えて、RPCF法、TPHA法及びFTA-ABS法などの方法も実施されるようになってきた。私共は、RPCF法を除く、上記4種の検査を比較検討するべく以下の調査をしたので、その結果を報告する。

II 検査材料並びに検査方法

A 被検血清

昭和45～46年に梅毒血清検査依頼をうけた検体の内、VDRL法又はTPHA法で陽性と判定された205件の血清。

B 検査方法

VDRL法、緒方法、TPHA法及びFTA-ABS法はそれぞれ現行所定の方法にもとずいて行なった。但し、緒方法は血清稀釈5倍、TPHA法は同80倍、及びFTA-ABS法は同20倍をもって陽性とした。

表1. 各種梅毒血清反応の比較成績（昭和45～46年）

梅毒血清検査法				陽性数	陽性率 (%)
VDRL 法	緒方法	TPHA 法	FTA- ABS法		
+	+	+	+	106	51.7
+	+	+	-	1	0.5
+	+	-	+	2	1.0
+	-	+	+	62	30.3
-	+	+	+	0	0.0
+	+	-	-	5	2.4
+	-	-	+	5	2.4
-	+	+	-	0	0.0
+	-	+	-	0	0.0
-	-	+	+	14	6.8
+	-	-	-	9	4.4
-	-	+	-	1	0.5
				205	100.0

註1) 被検血清はVDRL法又はTPHA法で陽性と判定されたもの。

2) 陽性率は全被検血清数205で除したもの。

III 検査成績並びに考察

得られた検査成績は表1に示す如くであるが、具体的には、

- 4種の陽性一致率は51.7%にすぎなかった。
- 不一致を構成する主たるものは緒方法で、緒方法（-）で他の3法（+）一致するものが30.3%も認められた。この点からも緒方法の鋭敏度が4法の内最も低いということが理解された。
- VDRL法のみ（+）のものは4.4%認められ、逆にVDRL法（-）でTPHA法及びFTA法のいずれか又は両方（+）のものは7.3%認められた。
- TPHA法及びFTA法の陽性一致率は88.8%、又、両者のいずれか一方で（+）のものは4.4%であり、合計93.2%が両者のいずれかの方法で陽性と判定された。
- TPHA法及びFTA法の両法がいずれも（-）であるにもかかわらず、VDRL法又は緒方法が陽性と判定された6.8%を直ちにすべて生物学的偽陽性と判定するわけにはいかない。これら各法に存在する生物学的偽陽性をいかにチェックするかが、梅毒血清反応に依然として残された課題である。
- それ故に、ルーチンの検査法としてはVDRL法、TPHA法及びFTA法を採用すべきものと考えられるが、検査の信頼性、鋭敏性及び時間的且つ経済的節約性からみて、津上たち（1969）¹⁾及び金田たち（1972）²⁾も報告している如く、VDRL法とTPHA法を第1次検査に採用し、第2次検査（確認）としてFTA法（場合によっては緒方法併用）を採用するのがよいと考えられる。

IV むすび

梅毒血清反応のVDRL法、緒方法、TPHA法及びFTA-ABS法を比較検討した成績について述べた。

文 献

- 津上久弥, 松永欣也, 尾山静夫, 梅毒血清反応検査方式に関する検討, 日本皮膚科学会雑誌, 79, 763—

* 秋田県衛生科学研究所細菌病理科

764 (1969)

2) 金田英子, 庄司キク, 森田盛大, 須藤恒久, T P H

Aテストについて, 第13回東北衛生検査学会口演

(1972)